

經濟學者としての大西教授——追憶

早川三代治

「經濟學者としての大西教授」。これは今日の追憶の集りのために主催者側から特に私に指定された題目である。然し乍ら本日、故先生の十周忌に當つて私の胸中に徂徠するものは、故先生が、かつて「春はうれしく秋は淋しいボン」と云はれたそのボンの町を流れるライン川に春の遠からぬことを告げるかのやうに氷の解けて流れ来る頃、思ひがけなくも先生の計が遙々と傳へられて来て、ドイツエル教授と共に悲んだ折りの

こと、その時から今日までの茫々たる歲月の歩み、又それらの歳月に先立つた兩三年の間に受けた忝けなき交誼である。故先生に就ての思ひ出は數多くあるのであるが、それらの追憶は決して一つびとつに切り離されてゐるものではない。それは美しい調和、圓らかな統一に於て、言葉を換えて云へば、一人の大西猪之介なる個性的實在として、又、故先生の好まれた言葉を借りるならば、「價值」として私の胸中に嚴存してゐる。

それ故に、少くとも私にとつては、「經濟學者としての大西教授」を語ることは、例へば完全なる彫像を好んで壊ちてその肢體を云々するが如き氣分を與へる。然し乍ら私は主催者側の依囑を喜んで諾した以上は、その意のある處を掬み、この題目の内容に何等かの首肯するに足る解釋を加へて、經濟學者としての大西教授を語り得べき手がかりを求め度いと思ふ。

先生の最も得意の着想の一つとして、先生の經濟學認識論の鍵として、「囚はれたる經濟學」より「放たれたる經濟學」への展開の契機の役を爲したものと、ジンメルの *Distanz-theorie* に學ばれた「眞理の一方性」なる見方があつた。私は今、先生の轍を履むことに依つてのみ、與へられた題目に近い内容を語り得るかに思ふ。それ故に私は餘儀なくして暫らくの間、我々をしてあれ程までに感動せしめた美しい調和としての先生の像を壊つて、その内から一つの部分をとり上げ、その一方面を視ることにしよう。唯、かかる際

にも私をして幾分の慰藉を感じせしめるものは、私の取りあげるその一部分が學徒として先生の地上に於ける生活の最も主要なる部分を形作れるもの、即ち文字通りに胴體トレンであつたといふ事である。

さて私は誰よりも先づ私自身が最も明確に知つて置き度いと思ふ問題を自問自答することから始めよう。恐らくそれは諸君にとつても最も大きい關心事であり且つは主催者側が私に對する意向も其の邊に存するのではないかと察し得られるからである。端的に問題を出さう。「大西教授は如何なる經濟學者であつたか」。嚴密に考へれば此の問ひは少しく妥當でない。然し乍ら、世間には一層卑俗な問ひがある。それを今の場合に當てはめて見れば、「大西教授は經濟學者として偉かつたか」と云ふ問ひである。我々は勿論、かゝる問ひに答へる必要を見ない。ダンテの雄々しい態度と同じやうに黙殺を與へるか、さもなければ憐憫の眼を投げ與へるだけで充分である。

さて暫らく、「大西教授は如何なる經濟學者であつたか」と云ふことを問題としよう。是れに答へるための判断としては如何様のレッテルにても貼られ得るであらう。私が斯う云ふ時に既に先生の快活な笑ひ聲が髣髴として私には感じられる。私がもし誤つたレッテルを、或は先生の好まれないレッテルを貼りもしたならば、先生は勿論遠慮なくそれを剥ぎとつて下さることを希ふ。

大西教授の自由主義はその根底が廣く且つ深い。恐らく後に、苦米地教授によつて語られるべき「人間としての大西教授」を考へるに就いても、先生の内部の窮極のものは「自由」に外ならなかつたと云はざるを得ないであらう。それ故に經濟學者として自由主義に立脚した事も單に學生時代から自由主義經濟學に親炙して來られたからのみではない。先生の思想展開の途上には、主催者の一人も云はれるやうに、帝國主義、社會主義が横はつてゐたのである。先生をして自由主義

へ近づけしめた所以は、古くアダム・スミス、マルサス、近くはマーシャル、ドイツエル等の影響であつたらうか。言葉を換えて云へば先生の自由主義は古典經濟學の流れに於ける自由主義と同様のものであつたらうか。我々は是れに答へて、先生を自由主義經濟學者とすることが出来る。が然し、それは或る一定の意味に於てである。我々は根本的には此處で一般にカント哲學の影響、具體的に云へばリツケルト、次いで左右田博士の哲學上の感化を重要視しなければならぬ。蓋し、意志の自由の問題が、その感化中の最大な烙印として先生の思想の上に遺し留められたからである。かつて先生が英國にラツセルを訪れた折り、ラツセルは先生をセミナーの學生に次のやうに紹介したと云ふことである。

「獨乙人以上にカンテイアンである」と。

先生に於けるカント哲學の影響は單に經濟學認識論のみにではなかつた。人生觀に至るまで「生の哲學」

によつて一貫された。「生」と「自由」とは先生の精神に於ては同一者であつた。それ故に先生を以つて自由主義經濟學者と云ふことは斯る意味に於てある。大西教授の形而上學は此處にあつた。先生の得意の言葉を以つてすれば、「人生觀」が此處にあつた。自由主義經濟學者としての先生は、學と人生觀を駿別し乍らも、斯る廣き國を背景に持つてゐた。

大西教授をして自由主義經濟學者の面目を發揮せしめてゐるのは、その「經濟學原論」、「外國貿易政策」、「文明批評」であらう。由來、經濟學は我邦にとつても外來の科學である。然るに我邦に紹介された學說にして徹底的にその理論が追求され、一つの組織にまで結晶した例は極めて少ない。又、それが紹介されるにしても部分的に過ぎなかつた。然るに自由主義經濟學の精神は大西教授のものとなつて、その「原論」、その「外國貿易政策」に結晶してゐるのを見る。我邦に於ては他に比類少なきまでに、自由主義經濟學に悟入

した事が先生の特色の一つである。學者にも甲なる學說は容易に理解し得るが、乙なる學說を會得するに困難な個性の強弱がある事を先生は説いたことがある。自由主義經濟學を深く理解したことは先生の個性の強みであつたと云ふ事が出來よう。私は此處で次の問題に移り度い。

遺稿として我々に遺された「經濟學原論」上下二卷の講義こそは先生の最大の關心事であつた筈である。その成熟、完成の程度に於ては勿論今日、「經濟學認識論」中に收められてゐる「囚はれたる經濟學」並に「生と學との距離」、或は「經濟史」に遙かに及んでゐない。然し乍ら、誠に勝手な想像ではあるが先生が自ら一番大切な仕事として心に構へてゐたために、その完成が遅引したのではないかと反省することは出來ないであらうか。瑕瑾を見出すことは容易であるが眞價を識別、味得することは至難なことである。然う考へ乍らも私は今、「原論」をとり上げて見ようと思ふの

である。此處で問題が凡そ二つある。その一つは「經濟學認識論」と「原論」との関係であり、他の一つは「原論」そのものゝ有する特色である。先づ前者に就て見よう。

「經濟學認識論」の前篇「囚はれたる經濟學」は二重の役割を持つてゐた。第一には從來の諸學派の方法上の基礎に對する再吟味且つ否定的批判である。而して第二には、先生自身の立場の反省である。其處に在るものは新に提供されるものではなくして、疑ひ得べきものは凡て疑ひ、否定し得べきものは凡て否定してゐる。「疑ふことに速やかなれ」と云ふベーコンの言葉は此處に當てはまる。或はハムレット型性格の片鱗をすら偲ぶことが出来よう。然し乍ら此の否定に於ける先生の態度はその根底に於ては單なる懷疑論者や、思想的ニヒリストのそれではなく、自ら一體系の樹立に大望あるものゝ準備であつた。先生は「體系」に對する不信者らしい口吻を屢々もらして、「體系を立てる

程に不正直者ではない」と云ふやうな言葉が屢々きかれた。然し、それはあくまでも反語である。先生は體系を深く重んずる精神を持つてゐた。問題は體系の内容價値の如何にあつたのである。恐らくは、自ら安んじ得る程の體系が得られるものとするならば敢て自ら回避するの要はない筈である。「放たれたる經濟學」への豫告を堂々と爲し得た氣魄の人、大西教授に、「體系」への大望の存しなかつたことを信ずる事は餘りに正直すぎることである。又、それを「若氣の過ち」と見ることとも學徒の本懐を解する所以ではない。但し先生はその所期の體系が得られた曉に於て、其處に久しく安住し得べき學者であつたか否かに就いては疑問が残る。恐らくは哲學の石を抱いて自ら惱まざるを得ない人であらう。然し乍ら兎に角に先生の學問上に於ける最も深い危機は後篇「生と學との距離」を胎んだ。これが「放たれたる經濟學」の基礎たるべきものである。經濟學認識論上の學問的意義から云ふならば、前

篇には提供すべき獨自の内容が乏しかつたに對して、後篇にては一應一つの定まつた解答を持つと云ふ點で遙かに意義が深い。此の點に就ては、手塚教授の文章（大西全集第十一卷文明批評卷尾所載）は先生と飯島幡司氏との間の興味ある一挿話を物語り、且つ手塚教授の極めて適切な解釋が下されてゐるのを参照され度

す。

「生と學との距離」に於ける結論の内容に就ては此處では觸れない。その結論そのものに就て既に方法論は上下され得るであらう。然し大西教授その人の學問上の立場はこれに依つて、少くとも形式的には決定されたのである。従つてその方法論によつて矛盾なく基礎づけられた原論體系を我々は熱心に蜀望したのであつた。我々の蜀望も大であつたが、先生の苦心は更に大であつた筈である。大西原論は先生の存命中に公刊されずに終つた。講堂に於ける講義は既に公的のものであるとしても、苦心推敲中に屬する未定稿的部分が

存したであらうと察せられる。それ故に今、遺稿として發表された全集中の斯る部分について云々するのは失禮であり、且つ少くとも私の本懐とする處ではないが、然し今や私は此の問題に觸れざるを得ない處まで來てゐる。私は故先生の許しを得て若干の事を直言し度いと思ふ。

さて問題は斯うである。「認識論」に於ける結論が「原論」の方法的基礎と適合してゐるか否か。私は残念乍ら不満足の意を表はさねばならぬ。然し乍ら、これは何等の辯解のない事情であらうか。講義は多分に教育的目的を持つ故に、研究論文と同一視し得ない場合の屢々あることも斟酌しなければならぬ。とまれ、私は此處に反對的批判者として立たんよりは著者自らと共に悲しみ度いと思ふ。「生と學との距離」の結論に於て、「メンガーとリツケルト」、「自然科學經濟學」と文化科學經濟學」と爲す時、二元論に到達すべき事は自ら識つてゐたのである。自ら破壊せんと志した處

へ到着したのである。二元論を二元論として安んじ得ないにも拘らず、あだかもその二元論へ到着したのである。凡てを許す立場は先生の爲めに微笑した。然かも先生は自らそれを識つてゐる。さればこそ、ジンメルの Distanz-theorie が此苦悶を「或る程度まで」救つた。これが先生の相對論的立場となつた所以であらう。私は敢て「或る程度まで」と云ふ。その苦悶の情の切々たるを「生と學との距離」最終數頁に就て見るがよい。方法的苦悶を持つものは悲しみを共にせざるを得ないであらう。此の點から、私は大西教授を比類なき正直な學者だつたと信じる。又、自らを識ると云ふ意味で賢者だつたと思ふ。さればこそ、一度び體系を成すとも正直であり得べき經濟學者であつた筈であると思ふ。

我々は又、遺稿として發表された「原論」の方法上の吟味に當つては、その執筆された當時の事情をも併せ考へなければならぬ。「原論」の二頁一頁が「認識

論」中の方法と照し合はされつゝ執筆されたものではなく、又、方法上の基礎に確信成つた上で統一的に執筆されたものでもないであらう。それ故に「認識論」に於て我々の蜀望せるものを「原論」に求めることは求める者の無理解とも云ひ得る。さればこそ我々に無限の遺憾と思はれるのは此の點に外ならぬのである。

「經濟的文化價值」によつて導かれたるべき「原論」體系の誕生が左右田博士によつても成らず、大西教授によつても果されなかつた。問題の發見は半ば既にその解決であると云はれ、又、方法並に嚮導概念の論定そのものが、充分に独自の學問的意義を有すること勿論であるが、我々經濟學に關心あるものは、その生れ來るべき體系そのものゝ顔を待ちわびてゐたのであつた。

次に「原論」そのものゝ有する特色について若干の點を取り上げてみよう。我々が「大西原論」と呼ぶその原論は大西教授その人の性格のやうに多彩な且つ強

烈なる個性を持つてゐる。加之、執拗をすら感じせしめる程に強靱さを持つてゐると思ふ。先生は屢々「論理の綾」と云ふ事を自信を以つて口にしてゐられたが讀者にして行論推理の表裏を追求する忍耐を欠くならば、先生の文章は讀者を迷路に誘ふか、或は術學的印象を與へる危険が伴ふた。然かもそう云ふ批評は既に幾度か行はれたのである。然し何れにせよ、それらは外部的の事である。我々は更に内部の問題に就いてみよう。

津村秀松博士の記るされてゐる處に依れば大西教授が津村原論（「國民經濟學原論」）の批判から出發して原論の研究を始めようと思ふとの意向を親しく浩然と同博士に諮つたことがあるそうである。既成體系の否定的批判から着手しようとするには、既に批判者にとつても一定の安固たる立場、積極的主張が把持されてゐなければならぬ筈である。然らざれば批判は畢竟單なる否定を出で得ないからである。恐らくは、大西教

授の胸中にはその頃（小樽高商赴任後程なき頃）既に津村原論を批判し得る立場が生長しつゝあつたのであらう。それが徒らな座輿の大言でなかつたであらう事は先生の性格からして我々の信じ得る處である。然し今日我々に殘されてゐる「大西原論」は斯る意圖を持つものとして現はれてゐるであらうか。又、その意圖の幾何部分が實現されてゐるものであらうか。勿論、私の問題としてゐるのは個々の部分理論、或は部分的説明の批判ではなく、全體系としての對立的批判の存在如何に就てである。「大西原論」は少くともその一瞥に於ては一點の奇も、一點の妙もなく、むしろ平凡な形相を持つてゐるものである。各種の文明批評或は幾多の經濟學上の論文の持つてゐた光彩陸離たる装ひは此處には乏しい。「囚はれたる經濟學」或は「生と學との距離」に於ける大西教授とは、少しく誇張を許されるならば、別人の觀がある。然し私は卒直に云ひ度いのである。此處に經濟學者としての大西教授の本領



があつたのであると。思ふに哲學は大西教授の愛好する處であつた。然しその哲學はどれだけ「大西原論」に幸ひしたであらうか。成る程、その方法的吟味の認識論には役立つた。その方法上の苦惱を味到せしめ、これを剋服せんとする努力を鞭達した。その學問上の價値はそれだけでも大きいに相違ない。然し「大西原論」はこの哲學なくしても生長し得たものではなかつたらうか。

私は是れから少しく「大西原論」の内部の組成に就いて考へてみよう。「大西原論」の出發點は人口である。「如何なる觀念より出發するかは學者の自由である故に、筆者は今、人口より出發す」と先生は云ふ。然し、この「人口」を出發點として撰んだ先生の立場の自由は一定の意味によつて既に嚴密に規定された自由である。何となれば「人口」を出發點とすると宣言した時に、その第一頁は「大西原論」の全組織を貫く精神を暗示してゐるからである。それはマルサスの

眞髓を探つて得たるもの、即ち「人口の無限繁殖の傾向」の再認識に外ならぬ。從來多く、餘りに多く試みられて來た原論に於ける「慾望」からの出發は、慾望そのものゝ分析説明が如何に巧妙であらうとも、結局に於て一つの本源的にして且つ本體的なるものを逸せざるを得ない。それは何んであらうか。慾望の程度並に大いさそのものを規定する或るものである。その或るものはそれ自ら既に或る大いさを有し、或る運動を持つ。而してこの或るものこそは、先生の好んで用ひられた言葉に従へば、「人生苦」の自己原因であり、自己結果であり、且つは無限の不平を窮訴する「人生苦」の體驗者なのである。

人口法則が經濟學法則ならざることを説く學者に、例へばシュムペーター教授がある。斯る立場からは一見、人口理論は少くとも「原論」に於ける問題ではない。然し乍ら、思ひを凝らして見るならば一般均衡理論も亦、別個の意味に於てはあがあるが、人口を問題と

しないのではない。勿論この場合に於てはそれは「人口法則」ではなくして、經濟的數量の變化の動向に有力に影響する外部的動因としてあり、従つて一つの與へられたるものではあらう。然し兎に角、人口は條件の一つとして問題とならざるを得ない。

顧みるに「大西原論」に於ける「人口」觀念は實に深き意味を持つ。私は未だ一個の個人的想像に過ぎないが、次のやうな聯想をすら抱いてゐる。嘗つて左右田博士が文化科學經濟學の嚮導概念として「貨幣」を指示されたに對し、大西教授は「人口」を以つて、「自然科學經濟學」と「文化科學經濟學」との結合概念とし、且つそれを嚮導概念としての統一的立場を考へられはしなかつたであらうかと。此の想像的私見は嚴密に云へばそれ自ら既に方法論的排撃に値することであらう。然し乍ら、大なる才能者の精神の奔放さを考慮に入れることも徒爾ではあるまいと私は思ふのである。それ程に「大西原論」に於ける「人口」の意味

は深く、その内容が豊かである。

斯く考へ得られるならば、マルサス人口論をこれまで深く原論組織の内へ織り込んだこと、マルサス主義者以上にマルサスに味到したこと、この事が經濟學者としての大西教授の貢獻であり、且つ「大西原論」の一大特色であると云はざるを得ない。前にも述べたやうに、或る個性を深く理解し得ることは、或る限られたる個性のみの爲し得ることであると云はれた先生の言葉を信じるならば、先生の個性はマルサスのそれを最も深く理解し得る強みを持つ種類のものではなかつたらうか。大西教授の人口論に就ては既に、南亮三郎教授（大西教授と人口論）、宮田喜代藏教授（大西教授經濟原論の出發點としての人口）、高島佐一郎教授（「人口と國力」の後に）の懇切明快なる解説論評の行はれてゐる今日に於ては、私の言は餘りに多くを談り過ぎたであらう。私は最後に、もう一つの問題に觸れることに依つて「大西原論」の他の特色を強調するこ

とにしよう。

それは「原論」上巻第三章に於ける「純生産物」に就てである。私をして卒直に云はしめるならば、「大西原論」の組織の内なる二大柱は、一つは前述の「人口」であり、他の一つはこの「純生産物」であると思ふ。「純生産物」の觀念は周知の如くに重農學派に發した。然し、大西教授はその「原論」に於ては、恰もマルサスに或る解釋を附することに依つて「人口」を取り入れたるが如くに、重農學派の「純生産物」にも一つの見方を與へてこれを採用してゐる。換言すればやゝ異りたる視角から「純生産物」を視てゐる。

人間社會を形成してゐる集團は種々なる標準から是れを分類することが出来るが、あるがまゝの相として先生の耳目を刺戟したものは、「生産的」と「不生産的」との人間社會の並立であつたのではなからうか。勿論、不生産的社會階級が消費の一方的關係を以つて「純生産物」に關係する事情は諸重農學者の既に觸れ

てゐる處である。それ故に、「大西原論」に於ける此點の着想は嶄新獨想と云ふ事は出来ない。然し、第一段に於て、現代社會に於ける遊民階級の擴大を基礎として「純生産物」の分配を説いてゐる個所は優れたる出來榮であると思ふ。次いで第二段に於て、「純生産物」と勞働との關係が論ぜられてゐる。今假りにマルクスの立場に立つ者よりすれば、其處に餘剩價值成立の理論が見出されないと非難を呈せられるかも知れない。然し、私は、マルクスの立場に據らずとも次の立言が許されはしないかと思ふ。即ち、成る程其處には社會的「純生産物」の大いさへ作用し、これを規定するものは説明されてはゐるが、社會的にある一定の大いさを持つ「純生産物」が如何に成立するやを説明することは看過されてはゐないだらうか。この「純生産物」なる一定の經濟的量は「大西原論」にては與へられたるものとして取り入れられてゐるに過ぎないやうな外見を呈してゐると思ふ。然し、それはそうであ

つてはならぬものである。社會的「純生産物」成立の問題こそは原論組織に對して與へられたるものではなくして、原論がその説明を與へなければならぬものである。その點に於ては前述の「人口」とは丁度反對の關係にあるものではなからうか。一應の感想は然るにもせよ、私は「大西原論」に於ける「純生産物」概念の導入を大いに多としく思ふ。その効果の如何はともあれ、少くとも學者としての勇氣を二重の意味に於て多としたい。先づ第一に、「純生産物」の概念は重農學派の流れを掬む限り、今日に於ては不人氣な概念であらう。敢て是れを取り上げるためにはその概念を深化する用意がなければならぬ。次に、餘剩價值理論に於てマルクスの立場をとらぬ以上は此方面から來るべき批判に答ふる準備がなければならぬ。私の見る處に依れば、「大西原論」は第一の點に就ては安心であつたが、第二の點に就ては猶ほ若干の考慮の餘地が残されてあつたのではなからうか。

さて、以上私は餘りに饒舌に過ぎ、且つ餘りに雑多なレッテルを先生に貼り過ぎたかと思ふ。而してそれらのレッテルは私のみが是れを承認してゐるに過ぎないものであるやも計り難い。私はキュラソウにジンのレッテルを貼る如くに貼り違ひ、或は又、白を黒と云つてゐたかも知れない。パスカルの智慧深き言葉にそむいて、「何事をも文字通りに釋いてしまひ」、又、「何事をも意味ありげに釋いてしまふ」ことの二つの誤りを犯したかも知れない。然かも先生に猶ほ貼り得べきレッテルは數多く残されてゐるであらう。經濟史家としての大西教授と云ふレッテルを貼る事も出来る。戰術家としての大西教授と云ふレッテルにても賣り出し得ることは「歐洲大戰史」を一讀したもの、首肯する處であらう。然し乍ら、それらはすべて看過するとしても、私は今日、私の指定された課題の範圍内で何人もが承認し得る、最上の登録商標を、故人の敬服されたパンタレオーニの言葉で登録したいと思ふ。曰く「經

「經濟學を知られる經濟學者」と。これこそ「經濟學者としての大西教授」に最もふさはしいレツテルである。先生も莞爾として受けて下さるであらう。然かも我々は既にこのレツテルを先生の存命中に公認してゐたのである。我々が常に先生を「小樽の大西」と呼んでゐたのは、眞に此の意味に於てはなかつたであらうか。

終りに臨んで、私は餘りに不遜な言葉をつらねたことを顧みて、先生の靈に陳謝したい。然し私の言葉は先生に對する批判ではない。先生はむしろ批判を好まれたが、私はそれを好まない。加ふるに私は今夕、此處へ、先生を批判せんが爲めに來たものではなく、先生の冥福を祈りに來たものなのである。故先生のために、天なる光の門の廣からむことを祈りにこそ私は來たものである。(昭和七年二月八日)

